ウィキペディアでまちおこし

みんなでつくろう地域の百科事典

伊達深雪

もくじ

はじめに
「強固な地域力」を生むウィキペディアタウン　6

第1部 ウィキペディアタウン、始めました
地域を知る・新たなつながりが生まれる

01 はじまりの「こまねこまつり」
地域初のウィキペディアタウン開催　14

02 歴史に埋もれた丹後の女性たち
「ウィキギャップ」とある女性郷土史家との出会い　37

03 みんな大好き「酒ペディア」！
地域を見る目の重層性　54

04 砂の鳴る琴引浜で高校生と「3Qタウン」
次世代につなぐバトン　85

第 2 部

読者から編者へ

地域情報を"正しく"発信する

05 地元の伝統産業と格闘した日々
ウィキペディア編集デビューの頃 118

06 見知らぬ誰かの助け舟
ウィキペディア・コミュニティの入り口へ 137

07 偽文書〝椿井文書〟が立ちはだかる
地域情報を〝正しく〟発信できるか 154

08 〝定住促進協議会〟からお声がかかる
地域コミュニティとの協働 171

09 うちの町には何もない？
地域の何を項目に加えるか 193

10 「亡び村」から「消えない村」へ
消えた集落の記憶を記録する 218

第 3 部

イベントから日常へ

ウィキペディアタウンの課題と可能性

11 誰もが町づくりの当事者へ
見本市と情報の整備 236

12 図書館発の企画とその継続を妨げるもの 257

13 ウィキペディアタウンの始めかた 289

おわりに 322

・文中の〈 〉はウィキペディアの記事名を示す。
・引用したウィキペディア日本語版のテキストは特に記載のない場合、2023年11月時点のものである。

コラム

01 オープンデータでできること
〝町残し〟とデジタルアーカイブ 34

02 ウィキペディアの3大方針＋α
人物記事は慎重に 50

03 様々なウィキペディア編集イベント
個人主催から専門機関での実践まで 80

04 ウィキメディア・コモンズとは
すべて無償で利用できる写真?! 114

05 「良質な記事」とは
答えはウィキペディアのメインページにあった 135

06 ウィキペディアのアカウントを取得するときに大切なこと 152

07 ウィキペディアの検証可能性
情報を発信することの影響と責任 169

08 日本語話者人口減を見据えたウィキペディアのアウトリーチ活動と機能追加 189

09 ウィキペディアの「特筆性」とは
項目削除の憂き目にあわないために 214

10 「消えない村」づくりに挑む人々 231

11 ウィキペディアに新規項目を作る前に
まずはその構造を知る 254

12 ウィキペディアの記事名と内容の関係 285

13 高校生のリテラシー教材としてのウィキペディア 318

はじめに——「強固な地域力」を生むウィキペディアタウン

２０２０年9月18日、イギリスの新聞「ガーディアン」が報じた、ある実験が注目を集めた。それはイタリアとドイツの研究機関が、スペインの複数の都市を無作為に抽出し、それら都市のウィキペディア項目に高画質な写真や詳細な解説文を加え、数か国版で展開したところ、市内のホテルの宿泊数が増加し、観光収入が年間約10万ポンド増えたと推定されるというものだった。

インターネット百科事典「ウィキペディア（Wikipedia）」——「ウィキ」はハワイ語で「速い」を意味する「wikiwiki」に由来し、「ペディア」は「百科事典（エンサイクロペディア）」を略した言葉である。「ウィキ」＋「ペディア」、この造語が意味するとおり、ウィキペディアは、リアルタイムで誰でも情報を更新することができ、一定の条件を守ればすべての掲載情報を自由に利活用できる、みんなの百科事典だ。すべての編集活動はボランティアで行われ、その成果物である情報は全人類の財産として共有される。イタリアとド

イツの研究機関が行った実験も、専門的な知見を持たない者でも可能な編集内容で、その大半はウィキペディアスペイン語版にもともとあった文章を、フランス語・ドイツ語・イタリア語・オランダ語に翻訳しただけのものだった（オランダ語版のみ実験が商用編集とみなされ、のちに該当の項目が削除された）。

この実験の結果、知名度や予算がそれほどない小都市では、広告代理店を使ったり派手なパンフレットを作ったりするよりも、ウィキペディアのページを充実させるほうが効率よく多くの人々に認知されうることが確認されたという。

ウィキペディアは今世紀を代表する発明のひとつといわれ、いまや多くの人々にとって情報を得る基礎的なツールであるインターネットの数あるウェブサイトのなかでトップ10に入るアクセス数を誇る。ウィキペディアに存在する項目は、その言葉を検索したとき高確率で上位に表示されるため、個人のホームページをはじめとする他のウェブサイトの情報と比べて、多くの人に閲覧される可能性が高い。

イタリアとドイツの研究機関が行った実験のように、ウィキペディアのこの特性に注目して、自分たちの住む町の項目を充実させようという取り組みは、日本では２０１３年にスタートした。

ウィキペディアなどを共同で編集・改善したり、初心者に基礎的な編集方法を教えたりするイベントは「エディタソン（editathon）」と呼ばれ、世界的に様々な団体や個人が様々なテーマで実施している。このうち特にウィキペディアで地域をテーマに編集するイベントを、日本では「ウィキペディアタウン」と呼んでいる。

最初の事例は、イギリス・ウェールズにあるモンマスという小さな町で２０１２年に試みられたプロジェクトだった。この町では、あるウィキペディア編集者（ウィキペディアン）の呼びかけに町議会が協力し、約半年をかけてモンマスに関するありとあらゆる項目をウィキペディアに新たに作成し、それらに関連する約１０００か所の建造物や展示物などに、各ページにリンクが飛ぶ二次元バーコード（ＱＲコード）の設置を目指した。例えば旅行者などが、自分のスマートフォンなど携帯端末で町のどこからでも詳細な情報を入手できるネットワークを構築したのである。近年、日本でも観光地を歩いていると、各所のホームページに誘導する二次元バーコードをよく見かけるようになったが、その先駆けのひとつといえるかもしれない。

モンマスペディアの翌年、２０１３年2月に横浜で開催された編集イベントが、日本における最初のウィキペディアタウンだと考えられている。２００５年からウィキペディア

日本語版の編集者、また、一時は管理者として活躍していた日下九八（くさかきゅうはち）（アカウント名・Kusaka 98）さんのガイダンスにより、〈インド水塔〉や〈横浜情報文化センター〉など市内の名所旧跡に関する４つのウィキペディア項目が編集された。この企画は、市民参加型オープンデータ、つまり二次利用が可能な地域のデータを市民とともに作成する取り組みとして様々な分野で注目され、主催者の想定の１・５倍もの市民参加を実現した。

地域情報を編集・発信するウィキペディアタウンという取り組みは、その後、地域資料の収集と利活用を模索する図書館関係者の積極的な協力により全国に広がった。２０１７年には日本全国で１００回以上の開催を数えたことも評価され、この取り組みに関わった関係者全員に「Library of the Year」優秀賞が贈られた。

ただ、外部の人々に向けた情報発信の手段として自治体が戦略的に主導したモンマスとは異なり、日本のウィキペディアタウンは、まず地域の人に自分たちの暮らす町への興味・関心を喚起する、はやりの「町歩き」に「調べ学習」を付け足したイベントとして普及していった傾向がある。

地域振興のためにウィキペディアを活用するのであれば、モンマスのように数百という項目を揃えないと効果が見えづらく、また、ひとつひとつの記事を町のアーカイブにした

いと思えば、それなりに内容を整える必要がある。しかし、質量ともにそこまでボランティアの市民に求めるのは簡単ではない。そこで日本のウィキペディアタウンは、まずはウィキペディアの普及を目指して、「意外と簡単に編集できるから、気軽に参加してみよう！」という形で育っていったのだろう。

一度イベントに参加しただけで、その後、ウィキペディアの編集を自ら進んでするようになる人はあまりいないが、地域情報のアーカイブ化や町おこしなど、なんらかの目的意識をもって、誰でもアクセスしやすいウィキペディアの特性に着目した人たちのなかには、本来の意味でのウィキペディアタウンの実現を目指す小規模なコミュニティも生まれていった。町中にウィキペディアの各項目にリンクする二次元バーコードを設置したり、地域に関連する項目を自治体のウェブサイトで検索できるようにしたりといった活用も始まっている。誰でも無償で活用できるウィキペディアをどんなふうに役立てるかは、アイデア次第といってもよいだろう。

２００１年にウィキペディアが誕生して以来、多くの先達が、世界最大の優れた百科事典を作るという、この途方もないプロジェクトに自らの意志で心血をそそいできた。しかし、誰でも編集できるウィキペディアを実際に編集しようという人はいまだに少数派であ

り、２０１３年に横浜で開催されて以来、全国に広まったウィキペディアタウンもまた、ごく一部のウィキペディアンと関係者だけが知る内輪の企画にとどまるものも多い。気軽に参加できるようなウィキペディアタウンの開催情報はウェブ上にも少なく、企画の詳細はウィキペディアンですら知る機会が少ないのが現状だ。

様々な地域活動に長く携わってこられたある人が、ウィキペディアタウンを初めて経験したあと、次のように話してくれた。

「ウィキペディアはひとりでも編集できる。でも、イベントで様々な人々が集まって、協力して地域のことを調べ、発信していく。その〝場〟で育まれたつながりが、さらに強固な地域力になっていく気がする」

日本版ウィキペディアタウンのはじまりから、10年。筆者はその後半の数年間で、おそらく最も多く、様々な立場からウィキペディアタウンに関わってきたひとりである。

ある時は主催者として、ある時は一般の参加者として。また、ある時は参加者をサポートする図書館司書として。さらには、参加者にウィキペディア編集を解説する講師として。どの立場にあっても世界最大の百科事典に良質な項目を増やしたいという思いは変わらない。現在も引き続き、郷土の人々と地域のウィキペディア項目の充実をはかるボランティ

ア・グループ「edit Tango（エディット丹後）」のメンバーとして各地のウィキペディアタウンに参加、企画・主催する一方で、高校や大学などの調べ学習や探究学習、情報教育などに適した活用を提案したりと、様々な形でウィキペディアに関わりつづけている。

この道を拓いてこられた先達の労に感謝と敬意を表しつつ、本書では、私のこれまでの取り組みを通してみえてきたウィキペディアやウィキペディアタウンの魅力や課題、その可能性について、また、ウィキペディア編集とウィキペディアタウン開催のための基本的なノウハウについて、経験から得た知識を包み隠さず述べていこうと思う。いずれもウィキペディアタウンという試みに魅了されてしまった私の個人的な経験をまとめたものでしかないが、本書がこれまで読者であった多くの方々が、ウィキペディアで自ら情報を発信する執筆者・編集者となる一助となること。あるいは、そうした執筆者・編集者を育て、地域を振興するためなどにウィキペディアタウンを活用したい方の一助となること。あるいは、ウィキペディア・コミュニティとウィキペディアタウン関係者の相互理解を育む一助となることを期待したい。

世界最大の優れた百科事典を作るという、この巨大プロジェクトと、それに携わるボランティア・コミュニティが、より開かれ、健全に発展することを願って。